

## ‘呪われた血’の叛逆詩人(13)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

### 目 次

#### 第十一章 Pisan Circle

本稿のテーマは

——ByronがShelleyと共にPisaに展界した詩的活動サークルに集結した詩人群の、豪華絢爛たる詩園を瞥見する——  
ことである。

1821年10月29日、Byronは——Ravenaを去ってPisaにむかう。途中で、BolognaでClareに、FlorenceでRogersに会う。

Pisaでは、Arno河畔のLau franchi 館でTresaと落ち合う。そして、また——

Shelley一家、Gamba一家の他に、Shelleyの友人、Williams大尉、Mayrocordatos公、Medowin竜騎兵中尉などと交わる。

そして、Medwinを相手に回想をつづける。

RavennaからPisaにむかう途中——無意識に、Byronは、自分の過去を一瞥し、そして、彼の過去は、彼を一瞥していた。

しかし、この二者の出遭いは、必ずしも詩人の未来に、良き兆、吉兆を示すものではなかった。

ImoraとBolognaとの間でByron卿の馬車とClare卿の馬車が、たまたま、お互にすれちがった。そして、二人は、この少年時代の友は、そこで五分間、懐旧の情をこめて話し合うことができた。

それは、なんという懐しい、劇的な五分間であったことか！

“この五分間は、私の一時間をもってしてもとても相殺できぬ、貴重な、すばらしい出会いの、ひととき、であった！”とByronはそのときの感懷をのべている。

このようにして、今、突如として、詩人の眼前に、詩人が、この世でつねに、最も愛した‘Male thing’ Clareが、竹馬の友として想い出を運んで出現したのである。

二人が旧交を温めつつ、互に握手をかわしたとき、詩人にはその心臓の鼓動が、自分のものでなく、幼<sup>おき</sup>な日の友、つついづつ、Clareの心臓の鼓動が、自分の手の指先にまで、ジーンと、つたわってくるのを覚えた。

‘It was a new and inexplicable feeling’

“それは、私にとって、あの世から湧きおこってくるような、ひとつの、新しい、名状しがたい感情であった！”と、さらにつけ加えて、その感懷をいとおしんだ。

1823年、詩人は――

ふたたびClare卿に会ったとき、友情に感激する激しい気持が、しかしながら、Clareに対し、いや、おそらく、Thomas Mooreに対しても、そしてShelleyすら、排除して、もうすでに、ぴたりと、静止し、プツリと絶ち切れてしまって

いた。

‘However much I admired and esteemed him……’

“どのように、私が彼を、讃え、尊敬しようとも……”

と、そのときの感懷をもらしている。

1821年、のこの偶然の出会いの直前、Byronは

“僕はClareということばをきけば、今でもきっと、僕の心臓は激しく鼓動しはじめる。”とかいた。そして――

もう一人のClaire――その名をきけば、詩人はきっと、彼の心臓の凍りつく、せんりつを覚えるのだが、――もまた、この同じ旅の間、――Pisaを去ってFlorenceへむかう途中――彼の馬車のそばを通りすぎた。

彼女は日記にこう書きつけている。

“Empoli にさしかかるほんの直前、私たちの一行は、Byron卿――そして、彼の旅の一行の従者たち――と、すれちがった。私たちがFlorenceに近づこうとしていたとき、私たちもまた濃霧の中に突入した。

それは、あたかも、Byron 卿、あなたの頭上で、空が、ガラガラと崩れおちるようだった！”

しかし、その空は――

Claireの頭上で、Mary Shelleyの、そしてTeresa Guicchoriの頭上で――そして、この順序で――やがて崩れゆくという運命を、たどりゆくのであったが  
……

詩人は――

Pisaへおもむいて、Shelleyが、彼のために見つけておいてくれた河畔のLanfranchi館を視察した。そしてすっかり満足した――ただし、河岸沿いのLungarno通りの交通は、はげしかったが。

それは――

城壁（へい）で<sup>かこ</sup>囲まれた、その庭園には今、熟れたオレンジが、枝もたわわにみのり、昔の封建時代の、亡霊の出没した、そして、代々激しい気性の城主のすんだ居城、そのものであり、詩人は、すっかり満足し、少年時代のNewsteadのByron家の居城を懐しく、詩人の心<sup>よみがえ</sup>に蘇らせた。

かくして、詩人は、――

追放以来の、あの、<sup>・</sup>倦<sup>・</sup>怠<sup>・</sup>と<sup>・</sup>退<sup>・</sup>屈、そして、落着かなかった、たえず移り変って、居を転じつつ住んだ、あの生活の、煩雑さを経て、やっと、ここに、落着き住む心境の、やすらぎをえて、詩人の性格に適した、ここから満足できる生活への慣例へと、落着くべく、決意を固めることができた。

その慣例のひとつは、Teresaをたずねることだった。詩人は、もう、3ヶ月以上も、彼女に会っていなかったが、今、彼女が父と兄Pietroと共に暮しているCasa Parraの館は馬で2、3分で駆けてゆける近いところにあった。詩人は、毎日、そこに、彼女を訪ねた。

ときのTuscan政府は、彼女ら親子に、一時的の収容所を、<sup>かりずまい</sup>仮住居を認めていたが、これ以上の処遇が果してTeresaにとって、あり得ただろうか。

彼女が“mio Byron”としての存在を、この仮住居で、はじめて、英国人の交友仲間たちと分かちあう必要がなくなったとすれば、その方が、むしろ、よかつ

たのではなかったろうか、とさえ、Teresaには、思えるのであった。すくなくともTeresaにとってCasa Parraの生活は、平穩だった！

3つのPalazzi di Chiesaの館のうちの1つはShelleyの一家が、これを占有していた。そして、そこからは、——専用の昇降段のある——Byronの館の、白い大理石の正面、そして、飾り窓を、斜に見ることができた。

もう一組の友人としての、Edward and Jane Williams——Edwardは、舞台作家としての野望に燃え、Janeは、美しいギタリストであった——も、Shelley一家に加わった。

さらに、ShelleyのいとこのThomas Medwinもいたが、彼はのちに、‘Conversation of Lord Byron’をかいて、非凡の文学的才能を示した。

さらにJohn Taaffe——a bogus Irish ‘Count’——は、‘Pisaの桂冠詩人’であった。

Maryは、こうかいている。

“かくてPisaは、今、‘a little nest of singing birds’と化してしまった。”

Shelleyを中心とした、このsociety, ‘a little nest of singing birds’は、同時にまた、‘a little nest of adulterers’——“不義密通者たちのちよとした、巣窟、集い”でもあった。

この両Williamは、どちらもまだ、結婚していなかった。そして、Jane Maryは、Shelleyの——情婦ではないとしても——最後の愛人となった。

‘Count’ Taaffeは——彼を殺害しようとした、ある結婚した女性とのScotland

での恋愛事件の後で、Pisaへと逃亡中の身であった。

このサークル仲間の中には、もう一組のIreland人の夫妻、Mr and Mrs Mason もいた。——そして、事實は、この夫妻はMr George Tighe と Lady Mountcashellであり——そして、Lady Mountcashellは、彼女の夫から、逃亡していたのである。

そして彼女のGovernessは、Mary Shelleyの母、Mary Wolstonecraftであった。

Byronは——

この2つの巢窟に、憩うべき、まさに、ぴたり、ふさわしい温床をえて、Shelleyのcircleサークル仲間をTre Palazzi（3つの館）から、詩人みずからのCasa Laufranchiの館へとすぐに惹きつけてしまった。

Byronの魅力の中心は、焦点は、——

水曜日毎の、彼の招待するdinner partyに集められた。このpartyにおいて、詩人の、尽きせぬ談話は、懐旧談、冗句、諧謔、議論へと、夜も更けて、午前3時まででも続き、とどまるところをしらなかった。

そして昼間は、この連中をひきつれて遠乗りへと出かけ、概して、Pisaの城壁をこえての、ピストルの、射撃訓練にまで及んだ。

Governorは、Byronを、他国者の、要注意人物として、彼がPisaの街の中で、ピストル発射遊びを行うことを、固く禁じていた。

しかし、詩人にとって、恰好の場所がみつかった。が、そこは、詩人と、そ

の友達のために、ピストル発射遊びが、射的場となっただけでなく、詩人は、そこで、彼の心をとらえた一人の美しい、農家の娘と出会うのであった。

1822年1月——

2年前に妻と離婚した‘a new singing bird’ John Edward TrelawnyがPisaへ、やってきた。彼は‘The Turk’というニックネームで呼ばれた。

(Byronは彼を‘T’または、‘Tre’と呼んだが) 彼は、このPisaの日日を鮮明に日記にかきつけ、後に、‘Adventures of a Younger Son’を出版し、その中で、彼は、

- (1) Far Eastにおける、若さをもてあましたある海賊の生涯を描き、
- (2) そして、結局は、名もない海浜で、火葬にふせられて、幕をとじる、というアラブの娘との、ロマンスを描いた。

さらに、彼は——後に、

生気を失いつつあるByronへの、彼の気持、feelingが、だんだん低下し、悪化するにつれ彼の激しい、狂うが如き、unfairな、だが、断片的には、冴えた筆致で、

“Records of Shelley, Byron, and the Author”を出版した。

そして一方、彼は——

みずからをa living 'Corsair'——

- (1) Byronの詩集を枕の下にして眠り
- (2) 6 フィートの高所にあつて
- (3) その、ギョロツク黒い目で、にらみつけ
- (4) 意欲的にあごをこわばらせ
- (5) 英国海軍での、無報酬だが、立派だった生活の間、航海術を体験し
- (6) そして、退役後は、海軍士官候補生として、今、なお、とどまっていた。

そして、1812年Byronの前に出現した。彼は今、30才だった。

Byronのピストル射撃の腕前は、彼の友人間での彼の地位を表象するものと、うけとめられてよかった。

‘Byronの手は、たえず、ふるえた。’と、Medwinは述べている。

それにもかかわらず、ShelleyやTrelawnyのいずれよりも、ずっと、うまく標的を正確に射つ、その腕前は、見事だった。

Byronは、よく、こう言った。

‘Shelleyは僕よりも、ずっと射撃は、うまい。だが、彼は発砲することよりも、むしろ、metaphysicsのことを考えているのだ。’

Byronは、水曜日毎のdinner partyにおいて、夜がふけるにつれ、酒盃を重ねるにつれ、——Shelleyは、これを好まなかったが——次第に話題を、みだらなこと、俗世間的なものへと、むりやりに、ひきこんでいった。



TrelawnyとMedwinは、Byronの、擲<sup>・</sup>揄<sup>・</sup>と煙<sup>・</sup>にま<sup>・</sup>く、奇癖にすっかりショックを受けたことを公言している。

Trelawnyは、貴公子Childe Haroldの、あの、莊重な、神秘性を期待していたのに、やんちゃな、茶目<sup>・</sup>っ気<sup>・</sup>た<sup>・</sup>つ<sup>・</sup>ぶ<sup>・</sup>りの、一人の、Don Juanを発見した。

Shelleyも、すべてが、‘Vats of Claret’赤ぶどう酒用大桶<sup>おけ</sup>に変わってゆくByronのやり方、ゆき方には、すっかりショックをうけ、だんだんと早くなる‘evenings’——夕べの集い——dinner partyからは、次第次第に、遠のきはじめた。

そしてByronに対するShelleyの気持は急速に、どっちつかずのものへと変わっていった。

Shelleyは、‘Cain’、‘Heaven and Earth’をかいたByronの詩才に惜しみなき讃辞をおくった。

‘Cain’は——

1821年12月に出版されて、大いなる憎しみを買い、呪われ、ByronはLondonの宗教界から、‘冷やかな、神を恐れぬ、悪鬼’として、喧<sup>けん</sup>喧<sup>けん</sup>、囁<sup>ごう</sup>囁<sup>ごう</sup>、たる罵声を浴び、非難の嵐をうけた。

しかしながら、この作品は、(Byronのromantic talesほどではなかったとしても)よく売れ、ものすごい反響を示した。

Byron自身、Medwinに書き送った。

‘My “Consair” days are over, Heigh ho!’

Cain を読んでShelleyが これを歎び、そして、激賞したのは、Luciferが、神々の人間の仕うちの諸々を暴露し、あばき立てたが故であった。

Byronは、その序文の中で、

‘Luciferの、dramatic challenge劇的な挑戦は、僕自身の所信の表明ではない’  
とのべているけれども。

LuciferについてByronは、こうかいている。

‘Luciferをして、牧師の如く語らせることは僕にとってむづかしいことであつた。

しかし僕はLuciferをして、靈的儀礼の範囲、限界を逸脱することなく、その範囲、限界内で自制すべく、僕のできるだけ、精一ぱいの努力を払ってきたつもりである’。

さらに——1822年2月、

詩人は、動揺の色を示した、——この出版をひきうけた——Murrayに、こう説明し、書き送った。

‘LuciferもCainもどちらも、the poet’s voiceで、語っているのではないのです。Luciferは、単なるthe first rebelにすぎず、Cainはthe first murdererにすぎないのです’。

皮肉にもCainは、Abelの祭壇上の血のいけにえを憎悪するあまりAbelを殺した——Cainの祭壇はByronのDiet食の如く、Vegetarian‘野菜だけ’のものであったから——

それにもかかわらず、彼の敵に対して——彼の親友Shelleyに対するように——CainにもLuciferにも、Byronは話しかけていたのだ。

Shelleyは、また、Byronの思想的背景と思えるUtopianismユートピア的理想主義空想的社会改良計画の深い物思いに、いち早く反応を示したのかもしれない。

Shelley自身の思想も、彼の‘Prometheus Unbound’の楽天主義よりも、彼の次の作品‘Triumph of Life’の絶望へと変貌しつつあった。

Shelleyは、このTriumph of Lifeの中で

‘人生の不可抗力、巨大な破壊力は、その最も偉大なその息子たちをも、Napoleonも、Voltaireも、ローマ法王も、皇帝たちも、そして、まさしくByron自身も——‘Taught them not this,——to know themselves’なる彼らの哲学なるがゆえに——押しつぶし、圧死せしめるものである’とのべている。

ByronのCainの中では、——人間がみずからを知ることは、もはや、手遅れである。

CainはLuciferから、次の如く語られる“あの遠い銀河系宇宙では神はすでに、完全‘perfection’を創造した——そして、それを破壊した”と。

Shelleyは2つのByronic ‘Mysteries’に異常な<sup>よろこ</sup>歓びを覚えたが、それもやがて、次の劇詩‘The Deformed Transformed’——1821年に完成——への批判へと変った。

Thomas Medwinは、この作品に関し、ShelleyとByronの間に、みじかい、するどい、やりとりがあったことを次のように報じている。

Byronは、この作品の草稿をShelleyに渡し“Shelley! この作品について、どう思うか。君の意見をきかせてほしい!”といったときShelleyは、それを窓ぎわに運んで読み、そしてすぐに引返して、ひとこと、きっぱりと云った。

“君の作品中、僕が今まで読んだものの中で、これは最低だよ”と。

そこでByronは、その草稿をポイと火の中にほうりなげた。

この作品はしかし、1824年に出版された。だから、Byronの、この、dramatic gestureは、彼がこの詩を、頭の中に、しまっておいたのか、それともそのコピーを保管していたか、いずれかであるという事実を、隠蔽したにちがいがなかった。

Shelleyの、こうした、Byronの、この作品に示した感情的激発は、この詩のもつ本質的弱点への、単なる彼の反応を示したものではなかった。

それは、この作品が、Byronのいわゆる、‘a Faustish kind of drama——部分的には‘Monk Lewis’の非独創的Wood Demon、そして、部分的にはGoetheのFaustにもとづく——のにおいをもっていたためであった。

そしてShelleyは、このGoethe—Byron 症候群に、たいくつしていたのかもしれない。

Byronは、The Deformed Transformedの中で——

16世紀のhero、——びっこでせむしのCount Arnoldは、Achillesの美と能力と力強さを求めて、これと交換に、Demon悪魔に、自分の魂を売りつける。

Shelleyは、この点でも亦、Byronが、自分自身の、びっこの不具に執心——もっともそれは、事実、人もうらやむばかりの美貌と結びついたものであるが——したことを、つよくはねつけ、反感をいだき、そっぽをむけている。

Mary Shelley——Mrs. Shelley——は

“Byronの生涯において、どの行動も——彼のかいたほとんどすべてが——彼が、身体障害者であることの影響を受けてないものはない”とかいている。

この作品中、Count Arnoldと、母との間に、くりひろげられた、あの冒頭の、やりとりは、実にGeordieとMrs. Byron——Byronと母——とのこと、即ち、彼の少年時代、彼の母がそのびっこのことを、口ぎたなく呪い、罵<sup>ののし</sup>ったことを思い出させる。

“失せろ！ このせむし奴！”と、彼の母はArnoldにむかって、ヒステリックに叫ぶ。

その罵言に应えて、Arnoldは苦々しい気持で“私は、生れたときからびっこののだ。母君！ あなたが私をびっこに生んだのだ！”と応ずる。さらに彼女は叫び返す。

“お前は incubus—女性とつれそう中世の悪魔—だ！ お前は‘鬼っ子’だ！ 月足らずの鬼っ子だ！”

ここにも亦、詩人の生いたちし日の、身障のゆえに耐え、ヒステリックな母の痼性に、耐えに耐えた心の鬱積の陰影が、この作品にも投げかけられていた。

そしておそらく、Shelleyは、この詩人の過去の鬱血への執着に、すっかりたいくつしてしまったのであり、うんざりした気持を示したものと推察される。

もっとうがった観方をすれば、Arnoldのこの背瘤は、われわれがすむこの世代の、この、奇形の病的に、狂った世の中を象徴している。

しかし、——

この背瘤は、本来、これが属する、即ち、悪魔の肩にこぶをつけるならば、われわれはもはや、これを取り除くことはできない。

悪魔は、彼がどこへいってもたえず、Arnoldにつきまとい、まず、手初めに、こう警告するであろう。

“お前は、お前のそばに永久にお前の影の如く、お前自身をみるであろう”

たとえ、理想主義者であれ、詩人であれ、これから逃れることはできぬ。Achilessでさえ、今一步で追いつけないという弱点、弱点をもつ。

Manfredは——彼のすばらしい才能にめぐまれながら——奇形の、稀にみる兇悪の星の下に生れた。

‘A bright deformity on high, The monster of the upper sky!’

‘天上にあって輝く 奇形の星！’

上空の怪物であった。

Byronの不幸の鍵となっているものは、彼の完全主義であった。即ち、彼があまりにもGolden ageを渴望したことのためである。彼自身の性格的欠陥は、彼自身の身体的奇形と苦痛だけでなく、当時の世の中の状態と大いに関係があったようだ。

‘The Deformed Transformed’の中のCharles VによるRomeの略奪はByronがしきりと待ち焦がれる革命であり、そして、16世紀のRomeから、墮落、腐敗したRomeからRome法王の逃亡したことは、19世紀の墮落した政治家たちが、London, Vienna, Constantinopleから——長く待ちのぞんだように——追放さ

れることを暗示したものであろう。

‘The Deformed Transformed’へByronが、より深い関心をもったと同様に、Shelleyがこの詩をひどく嫌ったのは、より深い一つの憂愁の徴候のためであった。

つまり、実は――

Casa Lanfranchiの華麗な才が、無意識のうちにではあるが、生れながらにして、a singing birdであるShelleyの翼を切りとりはじめていたのである。

ShelleyはByronのもつ雰囲気の中では、とても詩をかくことはできないと知った。

“僕はByron卿の身近で、とても長い間、生活しすぎてしまった。そのため、太陽（Byron）の光が螢（Shelley）の光を消し去ってしまった”

Shelleyは1822年、<sup>なげ</sup>歎きにみちた心で、そう書いている。

これは、まことに意義深いことだが、ShelleyがByronと親しく交わったこの時期の間、完成した唯一の詩は、Byronが、これをfeaturedした。そして、それは、それ自身、ちょっとした‘Faust’的詩というよりも、もっともっとそれ以上のものだった。

“Byron卿には 近づくなよ!!”

嗚呼、Shelleyの如き天才ですらも、と、わたしたちは、いまさら Byron のもつ強烈な個性、その毒気につよくうたれていった症候群を想起するのである。

ShelleyはByronの中に、Mephistopheless的なものを見出した。

Richard Holmes——Shelleyの伝記作者が機敏に観察したように、Shelleyも、The cinical fiend's remark ——シニカルな悪魔のことば——の翻訳にまぎれもなく、Byron的味tangをあたえている。

MephistophelessはFaustに説明する。

In truth, I generally go about  
In strict incognito; and yet one likes  
To wear one's orders upon gala days...  
I could not, if I would, mask myself here.  
Come now, we'll go about from one to fire:  
I'll be the Pimp, and you shall be the Lover.

事実、わしは、おおむね うろつく  
厳しい、おしのび姿で。しかも人は好む  
祝祭日には勲章を胸につけ……  
ここでわしは、かくれることはできぬ、そうしたくとも。  
さあさあ、わしらは却火をうろつこう。  
わしは売春取次人じゃ。そしてお前は情人になれ！

Shelleyは、Byronにみずからが、いささかでも影響を及ぼしたことを否定したが、しかし、their dear Corsairをa Cain——Adamの長子、弟Abelを殺害した——に変えたのは、ほかでもない、彼だったのだとそれとなく言うものもいた。

しかしながら、たしかに、ShelleyがByronの宗教的信念を動揺させることはできなかったが——彼はやがてByronを‘まあ、クリスチャンだね’と評した。



ShelleyがByronの詩風に影響を与えたことは、まぎれもない事実だった。

Byronの所謂、‘the wild, metaphysical, and inexplicable’ drama of Manfred は、DiodatiでのShelleyとの近密な交友の間に書き始められたのである。そして Cain——これはShelleyがRavennaに彼を訪れた、その翌月に、書きあげたのだが、これも同様に

‘In my gay metaphysical style and in the Manfred line’

でかかれた。とShelleyは批評した。

ByronがMary Shelleyと、もし、情事をもっていたらPisan circleをうまく買収していたかもしれないということは、一応、考えられることである。

ShelleyとMaryの仲はうまくいっていなかった。と考えられる。——Shelleyの悪魔の幻覚は、自らの手で、彼女を絞殺しようとしていた。

そしてProf Merchandは、Maryはなにかの刺激、なにかのはずみ、があったら、彼女はByronに惚れこんでしまったかもしれない。と信じた。

Christmasに、このPisan circleは——

ByronをIagoとして、MaryをDesdemonaとしてOthelloを上演しようと試みた。しかし、Teresaがこの上演計画を拒否した。

この結果のひとつのあらわれは、Byronのcircleが、男性のみのサークルとなりゆく傾向が、つのりゆくこととなった。

Christmasの日ですら、男性のみで、The Casa Lanfranchiで、女性なしに会食した。

Communeの夢を描くShelleyとしては、これを是認するはずはなかった。

しかし、それにもかかわらず、Mephistophelesは、the Turkish harem systemを支援することを装うことによって、結局、屈した。折れた。

‘They lock them up and they are much happier.

Give a woman a looking glass and a few sugar-plums, and she will be satisfied’

女は閉じこめておけ、そのほうがずっとたのしいのだ。

女には鏡とアメ玉を与えておけ、そしたら満足しているだろう。

Byronは、もひとりの支持者として、Bonaparteをあげることも出来たろう。かくてLadiesたちは馬で遠乗へでかける事もなくなった。

TeresaとMaryは、友人として馬で相乗りするのがつねだった。そして、それぞれの殿方の帰宅を迎えた。

“Our good Cavalier flock together……”と、この男の世界のことをかき、Scottの小説the Antiquary から

‘They do not like fetching a walk with the absurel womankind’

を引用した。

Trelawnyがやってきたことは、このmale elementを強化した。彼は意欲的に ByronとShelleyに2隻のボートをつくるように、つまりByron用には、より立派なものを、そして、もちろんShelley用には、より小さい方をつくるようにすすめた。

Florenceの上空をおおって立ちこめた濃い霧はClaireの身にやがて迫りくる禍を暗示するのみではなかった。

彼女は不吉な予感がした——それは

二度とAllegraには会えないという虫の知らせが感じられたことであった。彼女はEliseから、

悪魔Byronはやがて、Allegraを——彼女は彼の子ではなくClaireに生ませたShelleyの子供だから——彼の情婦にするという彼の意図を自慢していた。ということを知られた。

Claireは、みじめな気持でヒステリックになりShelleyにむかって——

もしByronが彼女にその子を修道院に訪ねてもよいようにしてくれるようにShelleyがByronを説得することができないなら——彼女がこの子を誘拐するのを手伝ってくれるように懇願した。

しかし、ShelleyがByronに近づいたとき

Woman could not live without making scenes

と不気嫌にのべてClaireのため、Shelleyのことは、たのみごとを避けた。

しさすがにShelleyも、<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>かん<sup>・</sup>に<sup>・</sup>ん<sup>・</sup>袋<sup>・</sup>の緒を切った。彼はClaireにかいた。

“僕がLord Byronとの親交にピリオッドをうつことは、僕と君自身と、そして、さらにAllegraにとって、きわめて重要なことだが……”

そしてShelleyは、さらにByronとの争いを‘Without words’即ち、‘With duelling pistol’——決闘——で、即決しようとする旨をもらした。

このことは、しかし、Lord Byronは全く知らなかった。

One singing birdが、このPisaのcircleから姿を消してしまった——もし彼が時機を失せずやってきていたら、このcircleをその周囲に惹きよせていたであろうに。

Shelleyの考えとしては、彼の友のLeigh Huntを自分たちのcircleにむかえるべく招くことであった。そうしたらPisaのLeighと、彼の兄弟の英国にいるJohnは新しい雑誌 the Liberal出版の運動をすすめるだろう。そしてこの出版は、ShelleyとByronの最近の詩を出版する推進力となるであろうから。

今や、Murrayは、この‘Satanic school’“悪魔派”には、しりごみしつつあり‘Cain’の出版のため、告訴される脅威を感じつつあり、もはやこの出版者と著者Byronとの間に輝かしい朝をのぞむ未来を期待することは決してできなかったから。

ByronはLeigh Huntに同情的思いやりをいただいた。そして彼の雑誌The Examinerがthe Prince Regentを‘A fat Adonis of 50’と呼んだことで投獄される破目におちいったとき、彼をたびたび訪問した。

いくさつもの書物が、Leigh宛に、とどけられていたが、それは彼の従僕によってではなく、Byron 自身の手によってもたらされた。そして、そのことに、この Hampsteadの民主主義者たる居留外人 Leigh は、とても深い感動をうけた。

しかし、——

ByronとHuntをしっかりと結びつかせるためには、Shelleyの存在がたしかに必要であった。さもないれば、The ‘canker of aristocracy’貴族階級の病む

癌腫——ShelleyがByronの中に、すでに探知していたが——ゆえにByronはHuntを批判していたかもしれなかった。そしてByronはHampstead setハンブステッド仲間の他のメンバーJohn Keatsをもすでに批判したかのように。

明らかにByronがきらったのは、Keatsの詩風だった。Byronは、それをsentimentalだと考えていた。

Keatsは、かつて述べた。

‘自分の靈感は、‘the true, the blushful, Hippocrene’‘真の、バラ色の、詩的靈感’である’と。

ByronはMedwinに

‘真の靈感は、‘Gin-and-water’“ジン<sup>・</sup>を<sup>・</sup>水<sup>・</sup>で<sup>・</sup>割<sup>・</sup>ったもの’だ’と。

Ravennaで、Shelleyは、Byronと、Keatsの死について論じた。そして、The Quaterlyの中でのJohn Wilson Crockerの無茶な、野蛮な批評によって、どのようにして、彼の死は、急がれたのであろうか。

Byronは、このことを悲しんだ。もっとも彼は、Don Juan, Cante XIの中で、Keatsのexpenseに対する将来の嘲笑に坑することはできなかったのだが。

T’is strange the mind, that, the very fiery particle,  
Should let itself be snuff’d out by an article.  
皆が云った。

Hunt一家が——Leighの妻子たちも、やってくるであろうから——このPisan

circleに紹介されるとき、Shelleyがいなければならない、と。

しかし、一家は、果してくるだろうか？ 1822年2月、ちょっと気になるメッセージが届いた。それは、異常な悪天候のゆえに出航はとても不可能だというメッセージだった。

そこで一家は、Englandの西海岸にとどまってShelleyが彼らに送ってやった金をつかい果して、さらに借財しなければならなかった。

ShelleyはByronを誘いだすことでClaireに手紙をかいたとほぼ同じころ、Huntに金を貸してやるために、Byronから250ポンドを借りていた。

Hunt一家が、海路やってきたのは、このようにして不幸にのびたため、もう5月になっていた。

そして一方、その間――

イタリアには春がきて、そして、春の到来とともに、このPisan circleも開散した。

いわゆる有名な'Masi affray'が、このcircleを開散させたのである。

3月24日――

このcircleの仲間たちは、馬にのつての、射撃練習からの帰途、背後から早駈<sup>りづめ</sup>けてくる馬の蹄の音をきいた。

それは、兵舎の門限時刻におくれまいと、都心にむかって早駈けてゆく竜騎兵の、Stefani Masi准尉の姿だった。

彼は、うまく御婦人の馬車には、談じたが、それから、彼の行途<sup>ゆくて</sup>を塞<sup>ふさ</sup>ぐ、がっかりとした紳士たちのwedgeくさび型体型に、ばったりとぶつかった。

Masiは、溝と、その外側の紳士Johu Taffeとの間のせまい間隙<sup>かんげき</sup>をつき切って

進み、そのため、Taffeの馬は後退した。

姿を消してゆく馬上の男、Masiを指さしながら噴然としてTaffeはByronにむかって叫んだ。

“こんな無茶なことってあるか？”と。

Byronは、Masiの後を追いかけた。皆もMasiを追跡した。Piagge Gateのまわりには群衆が、さっと集ってきた。

Shelleyがまっさきに、そこへついた。今回は彼が先がけしたにちがいがなかった。そして、頭に一撃を喰<sup>く</sup>らわせ、うちのめしMasiは意識を失った。もう一人の紳士からもMasiは鼻を血だるまにされて、この廷臣は全身打撲傷をうけた。Pietro GambaはMasiを乗馬用むちで強打し、Byronは、Masiに血闘を挑んだ。ByronはMasiの、准尉の肩章がよくわからなかったのでMasiを士官だと思いこんだから、その破廉恥を、横暴をゆるせなかったのである。

‘but I am no great tailor in uniforms’

この一騒動の中で、Masiは、ふたたび、どうにか兵舎にたどりつこうと強行突破をこころみた。しかし誰かが、——おそらくByronの御者であったが、後に調べられはしなかった——Masiの身体をフォークで——Teressaが、あとで、そう述べた——突き刺した。

Masiは‘自分は殺される’と叫びながら、脇腹をおさえながらthe Laugarno沿いにすこし馬で逃げたが、意識を失ってばったりと倒れた。

その晩、Pisaの街は大騒ぎだった。

異邦人たちが‘百姓一揆’を先導したので、ByronとTaffeは重傷をうけ、TrelawnyとMasiは死んだ——という噂がとんだ。が、事実は——Masiは一命をとりとめた。

しかし——

この事件とその法的な結着は、Gamba一家に不利にTuscany地方のフロンティア活動は、そのcircleを閉鎖することになり、かくして間接的にByronに不利な展開となってしまうた。

この事件にかかわり合いをもった、それぞれの家Gamba家とByron家はMasiに負傷を与えた<sup>かど</sup>廉で、身代りとしてその召使たちを投獄され、法廷ではTeresaが、  
Masiの負傷は、<sup>おおおだ</sup>Taaffeの殴打によるものだと思うと忠実に申立てたにもかかわらず——。

James Williamsは、彼を“False Taaffe”と呼んだ。Byronの従僕Titaは一彼の誤解をうけやすい、どうもうな口ひげは、つねに人目をひいたが——必然的に被告席につかねばならなかつた。

殴打の件は、無罪となつたが、武器を所持した<sup>かど</sup>廉で、有罪を申し渡された。

結局、最終的には、‘Pisaより追放’ということで釈放された。

しかし、それは——

Byronが、彼の同志仲間の彼にも、囚人たちと12コースのdinnerを共にすべく、彼にも贈つたのに、彼は、Byronの温情に浴することができずにPisaの地より追放されねばならなかつたのは、あわれだつた。

Titaは、一時Lerci湾のVilla MagniでShelly家に身をよせた——夏のヨット遊びのためShelley一家は、この別荘にやつてきた。

そしてByronがPisaを去るときは、すぐ主人Byronのところへ帰ることに



なっていた。Trelawnyも、Genevaでゴンドラづくりを管理するためにPisaを去っていった。

しかし——Byronが

この地を固執して、去らなかったのはいつもの如く‘a proven perch’実証ずみの安全場所としての、この地を去りたくなかったからである。

Byronの性格の二元性は、しかし、このたびのPisaの固執、長逗留、遅延ほどより顕著なケースは今までなかったことである。

Byronの一部は、エネルギー<sup>かたまり</sup>の塊であり、その一部は、きわめて無気力、不活発であった。

B自身の不安定な立場は、官憲と対立したGamba家の不安定な立場と同様であった。

Ravennaにおける場合同様、官憲が追放したいとのぞんだのは、Byronだったのである。

——“情婦を殺害し、その頭蓋骨を酒盃として酒をあふる悪殿様である”とspyが、そう報導したのだが——Byronは一見Vitican Appoloの如くみえたがPisaの一学生の印象によればJobヨヴの中に巢喰うSatan悪魔の如く振舞った。

Byronは、世界中をうろつきまわり、farmsteads農場付属建造物の中でピストルを発射し一騒動<sup>かも</sup>を醸し、すべての政治的珍奇さ、革命に加担する悪魔として見なされていた。

Satan悪魔バイロンは、そこを根城として、その彷徨をつづけるVilla別荘を、また別にLeghornの近くに、事実、かりうけていた。かくしてByronがPisaの生活をぐつぐつと延ばしている間、また、兇運が彼に襲いかかった。

Laga Zambelli——Byronの秘書——は、RavennaにいるPelligrino Ghigi

——Byronの専属の銀行家——から一通の手紙をうけとった。

‘Allegraが病んでいる。そんなに重態ではないが。修道女たちはByronに、その容態を見まもりつづけて欲しいとねがっている。Allegraはチブスにかかっており、しだいに熱がでてきている’という便りが舞いこんだ。

ByronがAllegraの “市で買いたいものがあるの。お金をもってきてちょうだい。” という、Allegraからのたのみごとの手紙をうけとってから、あれから、もう何ヶ月もたっていた。そしてByronが、この娘に目をつけ、気にかけてはじめてもう一年以上もたっていた。しかし、今ですらPisaからBagnacavalloへ旅しようという決心がまだつきかねていた。

Legaへ、Allegraの容態を知らせる伝言が次々とどけられた。

“Allegra がより快方にむかった——そして悪化した——そして死んだ。”

かくの如き事情、Byronの不決断の中で、愛娘Allegraはすすりなく修道女たち、そして、看護にあたった付添人たちAllegraの大好きだった聖者たち、そしてbambiniにとりかこまれ見とられつつ、1822年4月20日に死んだ。

この訃報をByronに告げることはTeresaにゆだねられた。Teresaがこの報を告げるや否や、Byronは気絶し、理性を失うのではないかとTeresaが思ったほど、彼は全く顔面蒼白となり血の気がサッとひいていった。

Byronは苦悶<sup>もん</sup>のあまり、Teresaにむかって、“しばらく、ひとりにしておいてくれ” とたのんだのでTeresaは、そーつと離れていった。

数日後、しかし、Shelleyに手紙をかけるほど回復していた。

‘僕はAllegraの死に対して、僕のとった態度をひなんすることばを今、思いつかない。そして、Allegraの死に対する僕の感情、気持は今、空白状態である。

しかし、これこれ、しかじかの手がうたれていたら、このような悲劇は避けられていただろうということが、僕にとって只今この瞬間はっきりとした”と書き送った。

そして1年後——Lady Blessingtonに

“彼女が存命中、彼女の存在が私の存在に必要なとは決して思われなかった。しかし——彼女を失うや否や、彼女なしでは生きられないかのように私には思えてきた”と書いた。

Byronにとって愛娘Allegraの幼い生命がはかなく、無情に消えていったとき、いや、冷酷に、むしろ、非情に父Byronによって消されたときに、その無為の自分を責めた、その告白のことばが、ある意味でなんと空虚なひびきしかつたええなかったことだろう！しかし、Byronのこのことばは、やはり、その瞬間の断腸の歎きを秘めている、瞬間の激しい叫びなのであった！

詩人Byronのひととなりの如実の激しい流露である。Byron卿とは、そのような瞬時の感情をそのままに生きた、その意味では典型的風格の人間詩人であった。

Byron卿が、端的に述べた——this or thatがもしなされていたら——のことばは、その措置は、Shelleyが忠告したように、Allegraを修道院の世話から引拂い、そしてClaire, ByronそしてTeresaが、修道院を見舞う手間を省くことだったのである。

このことについて——

Byronの伝記作家Doris Langley-Mooreは、Byronのずるい自己弁明、たんなるずるさにすぎないのだが、ということを見出し述べた。

愛娘Allegraの死に――

吾人は、今、追憶す。

かつてByronは、うたった。

熱血たぎる総明な、知性溢るる、勇氣にみちた、マルタの女、Spencer Smith  
が一年前の再会の誓いを果すべくByronを慕って後を追うたとき、

“僕は今、貴女に決別<sup>わかれ</sup>をつける だが  
いつの日か美しいこの地をみるとき  
貴女<sup>そば</sup>の傍に すめない僕は  
貴女のすんだ地に立つだけでやすらぐだろう。”

と、うたったその心境は、

生<sup>いのち</sup>命の君よ、君を愛す！

と、うたった、その心境は、

瞬発し、そしてその瞬間消えてゆくのであった。Byronの愛は、すべて、まぼ  
ろしの愛、虹の愛であった！

人間のこころは瞬時も、とどまることはないのだ！とどまるよりは、とどまっ  
て腐るよりは、瞬発して消えろ！とうたうByron詩は、虚<sup>うつ</sup>ろである。つねに、  
Byron詩は、永遠<sup>うた</sup>を詠わない。虚<sup>うつ</sup>ろなるがゆえに美がある。

愛娘Allegraの死に、慟哭<sup>どうこく</sup>するByronの性<sup>さが</sup>は、母親ゆずりの、瞬時にして千変  
万化する激しい感情の流露であり、いとも、あわれな悲しい性<sup>さが</sup>であったのだろ  
うか！！

Doris Langley-Mooreは最近――

Lega Zambelliのfilesをも含めてByronのfinancesを発見して、Lord Byron : Accounts Benderedと題する一冊の著書を物語風にまとめている。

ByronはAllegraをおろそかにしたことを弁明するにあたって、善良なBagnacavalloの修道女たちが、速達便の知らせを送ってくるのが手おくれになったと説明することはできるだろう。しかし――

たとえ、その至急の知らせがまにあっていても、Byronはおそらく、あのNapoleon coachをのりまわしていたことだろう。

このような状態でAllegraは救われることはなかったであろう。Claireは彼女の苦しい悶えを、<sup>もだ</sup>、<sup>はげ</sup>烈しい罵倒を――Shelleyもひどいショックを受けたのであるが――Byronにたたきつけることによってせめてみづからをなぐさめようとした。

Claireは、その後――

Viennaに向けて立ちコスモポリタンのgoverness-shipsの終生の仕事に終始する決意をかため、Roman Catholicの信仰に帰依し、さらに数ヶ月にわたる修道院の生活へと入っていった。

“Allegraの死というCatastropheによってClaireは、その等身大の自画像をくっきりと浮刻りにした。そして起ち上った”とClairの伝記作家Rosalie Glynn Gkylsは述べている。

Byronについては、同じような事情が述べられるはずはなかった。それにも拘らず、彼はAllegraをHarrowの丘の上の教会――彼自身の少年時代の最後の日の最もたのしかった場所――の墓地に埋葬してやろうとした。

それはByronの最大の心づくしであったのだが。

しかし——

教会の牧師および教会委員たちは、たとへ、貴族の場合であろうと、私生児（庶子）にまで、気を配るほどの留意に果して、その価値があるのかと考えたとき、Byronの切なる願いも、そのままに容け入れられず、Allegraは結局、墓碑名も刻むことなく教会のvestibuleの床下に埋葬されたものと考えられる。

今日、彼女の遺品は、the Marquesa Brigo所有の彼女の人形の一体と1924年に建てられたBagnacavallo修道院のplaqueだけである。このプラークには、彼女がLord Byronの娘である。そしてShelleyがたびたび彼女を訪れたこと、そして5才と3ヶ月で熱病にたおれ、急逝したことが記されている。

Byronは、Walter Scottに書き送った。

‘Whom the Gods love die young’

‘神が愛し給うものは、幼くして逝く’と。

Allegraの死に際して、Byronによせられた数多くの皮肉的評言の中で——

Mrs.Frances Trollope——作家Anthony Trollopeの母——の詩は、ひときわ光っている。Mrs.Trollopeの讃うべき詩の意図は、Harrowの教会教区委員たちが、この純真無垢な幼児へのmemorialを拒否した、その残酷な、無慈悲な、空<sup>から</sup>念佛を諷刺することにあつた。

しかし——

すべての真実を知らなかったがゆえに、彼女は、彼女が偶像化までしていたByronをも亦、無意識に諷した。

He saw her sicken and he watched her die,  
The soft small hands' last pressure was his own.  
His the last glance of meaning from her eye,  
And his to clasp her when the spark was flown.  
Then by her side in anguish down to lie,  
Silent and tearless without sigh or groan.  
'Tis not for souls of lesser growth to know  
Of such as his, how deep how strong the woe.\*

彼は彼女が病んでいるのを見た  
そして死ぬのを 看守った  
そのやわらかいかわゆい手の最後の感触は  
彼みずからのものであった。そして最後の。  
そして、彼の最後の一べつは  
彼女の目からのそれを意味し  
そして火花が散るとき  
彼女をだきしめた 彼の最後の一べつ  
だった。

苦しみ悶え 彼女のそばに  
それから 横たわり  
沈黙し 涙を流さず  
ためいきもなく 悶えもなく  
彼のこの苦しみは、この高貴な魂<sup>たましい</sup>のみしる  
いとも深く そしていともはげしい  
そのなげきよ。

1822年5月下旬——

遂にByronは、Gambas一家を、海浜の彼の新しいsummer villaへ5週間連れていった。

Leghornの上に位置するMentereno村の、このVilla Dupuysは、とくに、すゝめほどの格別な別荘ではなかった。

その壁はsalmon-redで、避暑に耐えうるしろものではなかった。Trelawneyがこれをテムズ河畔の郊外のロンドンっ子たちの棧敷席にたとえたほどのしろものだった。

まもなく水がなくなり、そのため召使たちは、この家に使用する水をくみに、一マイルはなれたところまでも、歩いてゆかねばならなかった。だから、

ここへ着くや否や、Teresaがとても賞美した庭の中で咲く、すばらしいtuber roses, jasmmine heriotropeは、みんな<sup>しば</sup>凋んでいたにちがいない。

Allegraの死は、Byronの気分を沈みがちにした。夕闇がせまるころがByronにとって、もっともムードの高まるときで、彼は、漁り火を、Elba島の遠景を、じっとみつめ追放の身を劇的に終えた英雄Napoleonのことを偲んだ。そしてTeresaとCheckersチェッカーのひとときに気をまぎらすことができた。

世間に、はげしくたたかれたByronのDon Juanに対してTeresaは、この不評を予知しえたものとして、またByronの文学的活動に対する最も良き助言者としてこの出版にあたって、やはり否定的態度をとってきた。しかし、彼女のその否定的態度、助言もすこしづつ変貌していった。

そのことは、彼女がByronの文学的活動に対して、特にDon Juanの出版に対して果した役割は、徐々に変わっていった。そのことは、たしかにByronがDon Juanの次のCantoをあえて世に問うたこと、そのこと自体の中にもわれわれは、Teresaの心の推移を即ちDon Juanへの彼女の評価の推移をうかがい知ることができるであろう。



Teresaは、今Byronの生涯の最高傑作Don JuanからByronを遠ざけておくこと、その出版への燃ゆるが如きByronの衝動をいつまで抑えることは、もはやできなかった。

Teresaには、Don Juanの文学的価値が、わかりすぎるほどわかっていた。

これを、あえて世間を敵に廻してでも、世に産ぶ声をあげさせようとする詩人の心境の推移を知りすぎていた。

それゆえに、詩人が、Don Juanの次の新しいcantoをとにも、かくにも、船出させようとしたとき、このnew cantoが

‘more guarded and decorous and sentimental’

であるならばという条件でTeresaは、その出港停止を解禁したのである。

しかしTeresaの詩人にむけた心は、詩人のよき文学的助言者、援助者、激励者、というよりも、いや、その役割の履行者というよりもむしろ、実に、彼女の立場はByronとの家庭生活に落ち着くことがすべてであった。

Madwinが

ByronはTeresaにとっても執心した。とても熱をあげた。だが実は、ByronがTeresaに恋をしたわけではない。

と云ったのは、真実をつたえるものではない。しかし、ByronのTeresaへの愛は詩人Byronの恋がつねにそうである如く、退屈に近いものにすでになりつつあった。

今までに、もう長い間、見られてきたもう一つの詩人の心の推移は、今や顕著に現れてきた。

詩人の金銭への関心、執心が高まってきたことである。

Lady Noel-Byronの妻、Anabellaの母——が1822年1月亡くなっていた。したがって以後はByronが、その名前だけでなく6000ポンドばかりの収入——そのうち2500ポンドは彼が彼女から贈られたのだが——を自由にすることができるようになっていた。

今や、彼は、法的に友人たちに対して“Noel Byron”あるいは、“N.B.”とみづから署名した。彼はMooreに書き送った。

“君は、僕のこの新しい署名の最大の利点がおわかりかね？これは“Nota Bone”——‘注意せよ’——あるいは、Noel Byron, あるいは、……を意味するのだからネ。”

HuntやStendhalに云わせると、“Byronは、それがNapoleon Bonaparteのイニシャルを共有していることをよろこんでいる”と。

Byronが現実にもその金を手中におさめると、彼の中にGordonの血がしきりにさいわいで、彼にむかって‘ある目的のため、その金を貯めよ’と、せきたてるのであった。

Don Juanの中で、彼は彼の新しい習慣を老いぼれのみじめな相と嘲笑している。

So, for a good gentlemanly vice,  
I think I must take up with avarice

かくて、善良な紳士の悪徳よ  
予は、どん欲と仲良くしなければならぬと思うよ。

これはByron自身の戯画像であったのだ。Byronが今、真にやりたい衝動は、彼の個人的かかわり合い——Teresa, Augusta, her children (AdaはByronが、すでにこれを扶養していたが) ——のすべての面倒を見てやれるだけの、そして革命的運動をすすめること、あるいは新世界the new worldに移住することによって、もう一度飛翔の思いを遂げるだけの莫大な金を蓄財することであった。

それゆえに、Byronは蓄財に意欲的になったのである。

まだMonteneroにいるころ、あるちょっとしたゆきずりの出来事が、彼の想像をとらえた。

Leghorn港に停泊中のAmerica艦隊の船上に招待され、アメリカ女性から、

Byronの胸のバラを欲しいと懇望された。そして、その艦長から、Byronの詩を示され、その艦隊司令から、Americaへのfree passageを提供された。

Byronのjournals——その5月に、再刊されたが——英国にくらべて、フランス、ドイツ、アメリカでより健全な売行を示していることを特に言及した。

Byronが‘a nod from an Amirican’を‘a snuff-box from an emperor’よりも、よろこんだのは、もちろん不思議ではない。

Huntはおくれて7月1日Monterenoに着いた。ずっと以前に移りすんでいた家族たちをGenevaにのこして今まで経験したことのないほどの the hottest houseにやっとの思いでたどりついた。

このVilla Dupuysにおける心理的ふんいきは、やはり同様に熱っぽく、こうふんしていた。というのも、‘poor Pietro自身を含めてItalian servantsの間で激しい一騒ぎがもち上っていたときと、Huntの到着は、同時期であったから。

Fletcherは、警官を呼びにやった。そしてこのtiresomeな一家を追放しようとする長期にわたる官憲の決定は、この騒ぎに合せて即座に下され、宣告された。そして、父子ともども、Luccaとここを立ち去り、そこの収容所に、談じこむことをのぞんだ。

ByronとTeresaは、1月3日Casa Lanfranchiへ帰っていった。一階は、Hunt一家へ無料で引渡された——それはByronの寛大さとShelleyの労を惜しまぬ好意によるものであったが。

Shelleyは、Leghornに、最後のヨットをのこしてHunt一家と定住すべくLericiからPisaへやってきていた。

Shelleyの場合、ここに移りすんだことはそれなりによい結果をもたらした。

ByronとHuntの場合、二人の間は、うまくやってゆけたが、しかし、あまりにも多くの不都合な決定的要素があった。

即ち、Huntの子供たち、病弱な妻Marianne、Byronの飼育している動物たち、Italyの社会的情勢——Byronは、その中で一役買ったのだが——そして、Huntと彼の、the Liberalというjournalによって代表される“Cockney”の文学的背景

etc.まことに不調和なこれらの諸の要素は、到底調和のとれた均整を構成するはずはなかった。

Marianneは、偏狭のゆえにItaly語を学ぼうとせずTeresaも偏狭のゆえではないとしても英語を話すことにあまりなじまなかった。HuntはTeresaのことを“a kind of buxom parlour border”と呼んだ。

Byronの評判名声は、Marianneのために、ずいぶんと損われ、また彼の邸宅の四方の壁は、彼女の幼児たちのため、ずいぶんといためつけられた。

ある日——

Byronは、Marianneに

“あなたは、Trelawnyをどう思いますか。

Trelawnyは、これまでずっと僕のモラルにさからった発言をしてきた。そのことをあなたは、どのように考えますか”ときいたことがあった。

そのとき彼女は、この質問に対していかにも田舎風の主婦（あかみさん）然として<sup>しんちつ</sup>辛辣に答えた。

‘私は今はじめて、Trelawnyたちのことを聞くのですよ！

Huntの子供たちは——おそらくRousseauの理論によるものであろう——言論の自由の考（理論）に基き育てられていた。

彼らの早熟さと抑圧されない自由、勝手な破壊性は、Byronでさえ、ぎよっとさせるものがあった。

Byronは、彼らを‘Hottentots and Yahoos——ホッテントット人、とフー（ガリヴァー旅行中の人間の形をした化者）——とよんだ。

他方、Byron自身の飼育する無数の動物たちのためたえず被害をうけるひっかきあとのため、Huntの子供たちの落書きに、ひんしゆくしながらも、文句をいうことも出来ずByron自身閉口して立住生させられる、にがにがしい気持だった。

白い歯をむき出しにして吠えるBulldogのMorettoは

‘Don’t let any Cockneys pass this way’とByronから指令をうけて階段の上のおどり場にいつも配置されていた。

あるときはHuntの一家の搾乳用<sup>きく</sup>の雌山羊——それは、はるばるHunt一家がロンドンから連れてきたものだったが——の片耳をその当直勤務中喰いちぎったことがあった。

the Liberal誌に関しては——

この前衛的機関誌は、うまくゆかないだろうと、Byronは、診断していたし、

また、自身彼の多くの英国人たちとくに、Mooreは、彼がロンドンなまりの方言を使用するのをByronの名声、評判に悪影響を及ぼすのではないだろうか、と心配した。

全般的に、この間の事情をHuntが評して

‘There was a sense of mistake on both sides’

と述べたのは、実に当を得たものであったろう。

そしてShelleyは――

ByronとHunt――どちらも激しい行動家である――の間に立って、なんらかのlink連結環になってやろうと意図したのであったが、Allegraの死後というのは、規則的にByronに合うことは、できないと感じた。

LericiでShelleyは、波うち際でくだけ散る白い飛沫<sup>ひまつ</sup>の中で戯れるAllegraの裸の姿を見かけたことがあった。

彼の脳裏の中にAllegraの幻影が、あのかわいい手をたたきながら、<sup>た</sup>頭つたびにWilliamにむかって

‘There it is again――there’

と、そう絶叫したものだった。

それにもかかわらず、みづから買って出たこのlinkは、今やAllegraが死んで以来、とぎれとぎれの断続的なものとなっていたが、それにしても得がたい貴重なものとなっていた。しかし、この貴重なlinkすら、やがて存在しなくなっていった。

Shelleyは、ByronにわかれをつけLeghornに帰った。そこには、WilliamsとCharles Vivianという名の少年がShelleyのthe Don Juan号を出帆させるのを手伝うべくまちかまえていた。

天候は、しけ模様だった。7月8日午前3時the Gulf of Speziaには、暴風が吹き始めていた。船頭が、いった。

“洋上に立ちこめた、あの白煙をごらん下さい！悪魔がいたづらをしかけつつある！”

Shelleyの一行は、地中海の激しい嵐とスコールの中へと船出して遂に、不帰の客となった。

Italyのフラッシュ船が、Byronの金貨がこの船に積んでであると誤解して、この船に故意に衝突したのだという噂が<sup>うわさ</sup>流布されたが、それは、まず無視されてよいだろう。

スコールの中を、漁船が近づいてきてShelley一行を連れ去ってやろうと申出てくれたといううわさの方が、もっと信憑性がある。

その申出に対し‘No!’と、かん高いこえが、応答した。

そしてWilliamsが、帆をたたみこもうとしたとき、その同じ男が、彼の腕をつかまえた。

Shelleyは、その男をしっていた。

彼は、its Roman ‘triumph’の生涯をうちくだきたかったのであろう。

そして、もし、‘deep night’が、やはり、‘ere evening’に、彼をつかまえていたら、あのくだけの波もLericiにおけるように魔法の幻覚にみたされたことであらうものかと信じてよいだろう。Don Juan号をつくった男は、このヨットは‘like a witch’のように走るのだ！といったではなかったのか？

Maryは、流産から回復しつつあったが、しかしDon Juan号が行方不明になっ

たことを知るや否やJane Williamsに伴われて、夢遊病者の如く、Don Juan号を探して彷徨<sup>さまよ</sup>いつづけた。

11日目にByron宛にTrelawnyから警告がよせられていた。Trelawnyはこうかいた。

“彼が私にその模様を尋ねたとき、彼の唇はふるえ、彼のこえは口ごもった”

と。

Byronは——Shelleyこそ、彼が“今まで会ったことがないほど、例外のない、この世で、最もすばらしい、最も善良な、最も、非利己的な人間である”と、信じていた。

1週間後、7月18日、ShelleyとVivianの死体がViareggioの海岸にうちあげられた。そして、その前日、Williamsは、すでに、そこに打上げられていた。そして、Trelawnyがこれらの死体をひきとった。

TrelawnyはByronとHuntをよんで、この異教徒、無信仰者Shelleyの火葬一切を8月15日、16日の2日間、連日にわたって、とりしきってやった。

腐爛死体は、衛生当局が埋めた砂からほりおこされねばならなかった。

“われわれもみなこのような姿に、似てくるのか？なんぢや、これ、羊<sup>ひつじ</sup>の死体ぢゃないか？”

Byronは、15日、Williamsの遺体を見たときそう叫んだ。

うず高くつんだ火葬用の薪<sup>まき</sup>とともに、遺体に油とワインを注いだのち、Byronは、他の連中と海の中にとびこみとても激しく胸のむかつくのを覚えた。



その翌日は、Vivianと‘Shiloh’の出番だった。ByronはShelleyのことをShilohと呼んだが、Shilohは、あの宗教的狂信者、Tonna Southcottが1814年、誕生させることになっていたはずの新しいMessiah救世主だったのである。その誕生を見ずに、彼女がその代りに、水腫症のため死んだ。

Shelleyのポケットの中にあったKeatsの一冊の詩集‘Lamia, the witch’は、もはや保管に耐ええないものとなっていたが、Trelawnyが、その中心部を保管し、のちに彼は——とてもこれを惜しみつつ——Maryに、それを遺品として譲り渡した。

Byronは、Shelleyの頭蓋骨をのぞんだ。しかし、それは、猛暑の中で、とてもほっそりとうすくなって、ぼろぼろに砕けていた。

TrelawnyはのちにByronがこれを、drinking cup酒盃として冒瀆しないように、自分が保管したいとの素振<sup>もふ</sup>りを示した。

——もっとも、彼の真意は、最も親しかったByronにひきとってもらうのが最適であると信じて——

Shelleyを火葬にふしたのち、Byron自身の浄化がさらに、ずっと徹底的なものとならねばならぬはずだったから、Byronは、彼のヨットthe Bolivar号まで沖合に1マイル半を泳ぎ、また、ひっ返した。その結果、彼の肩も腕も‘St Bartholomewed’の如くすきとした。

“家へ帰る途中、われわれは、うたい、笑い大声で叫んだ。”  
とHuntは、書いた。

Byronは、Don Juanの最近のCantoの中で、the right to laugh at all Thingsを主張していた。

To laugh at all things—for I wish to know  
What, after all, are all things—but a show?

嘲笑え！嘲笑え！すべてを。  
知りたいのだ、切に切に  
所詮、何だというのだ、  
世のすべては、ショー以外の。

たしかにTrelawnyはShelleyの葬儀を結局showにした。だが、しかし——それは、Juanすら笑うことのできないshowだった！——もっとも、ヒステリックに笑えばそれは、別のことだが。

1818年、Byronは、はっきりという書いた。

“われわれは、もうこれ以上彷徨いつづけることはやめよう！”と。

そのとき以来、Byronの心は、Teresaのもとで、いこうことはできたが、彼の想像は、決してさまようことをやめなかった。

それは、彼の慢性病的、退屈な倦怠の表現に他ならなかった。

詩人のimaginationのさまよいゆくところ、それは、ときに英国の春、ときに、the Neopolitan、ときにGreek rebelsのことども、ときに、South Americaの‘Bolivar’s country’であった。

Shelleyの死後、地中海周航の想いは、今となつては、むしろ嫌悪感を覚えるものとなっていた。ゆくならば、その他の多くの海を考えた。

Shelley自身はByronにGreek側のthe Adriaticアドリア海を横断したらどう

だと、しきりにすすめてくれたことがあった。

そのときByronは憶<sup>おも</sup>いだしていた。彼とPietro (Teresaの弟)が1821年、Greekにゆくことを切望していたときのことを。

Teresaは、目に涙をうかべ、おえつし、Byronとのわかれを惜しみ、その涙ゆえにByronは、ギリシャ行きをあきらめねばならなかったことを。

Teresaの現在の立場は、そして18ヶ月後——もっとも深刻なものとなっていた。彼女は彼の愛人Byronと同じ屋根の下で暮すようになっていたのでGuiccioli伯爵はTeresaへの扶養手当の支給を取消す許可を得た。

したがってByronの担うべき多くの義務の中で先づ第一に履行すべきことは彼女を、彼女の父親の家へと移りすまわせることであった。

Gamba家ではLuccaにおいてByronを充分もてなすことができないこともあって、このたびは、GenoaにByronと一家がともに暮すための充分大きな館<sup>やかた</sup>を住み家とした。そこへByronは、移らねばならなかった。

しかし——Byronは、

この住みなれた土地を、追いたてられるように、急いでたち去ることはできなかった。

そして、Hobhouseが、9月15日Pisaに着いた。彼と旧交を温めるのに2、3日かかった。彼の妻Annabella同様、Teresaの存在が最初は、Hobhouseにとっては、Byronの最もすばらしい友として、ふさわしくないものと映ったからである。Hobは、彼女を

——‘a tolerably good looking young woman’

としてうけとめた。それが、彼の彼女への第一印象だった。

しかし——Hobhouseがやってきたことは、ギリシアの愛国者Nichoas Karrelasからの、熱烈なコールによって、Byronにとって熱狂的な生涯の、有終の美を飾るべき運命をたどりゆくことになったのである。

それは——

Byronの心にいま点火された、ギリシアの独立運動に、身を捧げんとする熱烈なラブコールであった。

“自分の行くべき国は、やがてGreekとなりゆくのだろうか” それとも——

かつてHobに語った如く、“England in spring”に——祖国、英国にいま、帰心、矢の如き、郷愁を覚えたのだろうか。

終に——Byronにとって今、

山なす如く、心にとりつかれたもの——

というのは、詩人は、何ひとつ手離そうとしなかった——が、すべて、一つにpackされ、無数の飼育動物は、檻<sup>おり</sup>の中に、収檻され、三羽のガーガー鳴き立てる鷺鳥は、9月29日のMichaelmas Dayに背いて、詩人の馬車の後にほうり投げられた。そして、Lega ZambelliはHuntの子供たちの、いたづらの損傷に対して賠償<sup>ばい</sup>を支払った。(ガラス商Mateiに対しては、この家の修理とこわれたガラスと窓を取替えてもらうことで支払いをすませた)

Byron一行は、Bagni di Luccaと荒涼たるLericiを通してGenoaへと旅した。ここでByronは、Viareggioでの教訓を忘れ、Trelawnyと‘broiling’ sea焼けつくような海を数時間全力帆走した。そのため、けだるくなって、4日間ベッドに横はりリューマチと胆汁過多の激しい発作、便秘etc、その他いろいろな病に苦しんだのである。

ふたたび、Promethean的テーマが、いちどきに脳裏にどっとおしよせてきた。というのは、詩人のもろもろの感覚は、あのいまいましい悪魔の手<sup>に</sup>負<sup>え</sup>ぬ奴<sup>が</sup>が岩<sup>に</sup>鎖<sup>くさり</sup>でつながれ、その横隔膜<sup>はげわし</sup>を禿鷲<sup>に</sup>、かじられているような気分であつたから。

一行は、5日目には出帆し突然海の大気をよりさわやかに感じ、そしてつめたい魚で、この地方のワインを賞味した。

9月30日夜、Genoaに入り、Albaroの郊外の丘にのぼった。

ここでByronは淡々とした気持で、Huntの一行とわかれた。

そして、彼らは未亡人Mary ShelleyとVillaを共有し、一方ByronとGamba一家は、別館のCasa Saluzzoを占據した。

3羽の鷲<sup>が</sup>がうやうやしくByronの後を追った。というのはByronはMichaelmasのために鷲<sup>の</sup>の首をしめる気分になれなかったから。

もう一度、しばらくあの窓の多い庭つきの、地中海の美しいパノラマの眺めをたのしめるイタリー風の別荘の人となった。

Teresaは、不幸な多くの兆候にもかかわらずByronが、平和<sup>に</sup>ここに定住してくれたらなと、切に切に望んだにちがいない。

10月15日出版のthe Liberalは呪いにも似た憎しみとわめきと、哄笑の嵐が、これを待ちかまえていた。

ByronのVision of Judgementは‘非情なる野獸<sup>じゆう</sup>的、下劣な話であるとされた。

ShelleyのFaustの翻訳は‘Goetheに対する劇詩’であると評された。

Leigh Huntの詩集は‘うぬぼれとたわごとと無知を示すのみ’と評された。

この批評に挑戦してByronは自分の詩の作品の原稿一切をMurrayからthe HuntsにtranferredしてMurrayを‘a sad shuffler’と呼びつけにした。

今、Byronの心には一つの葛藤<sup>かつとう</sup>があった。それは――

金銭への強い関心――死後、愛する者たちへおくる遺産を、そして革命資金のためを思うとき――と、そしてそれが自分の詩に対する影響力を与へるだろうことを、つまり自分の詩は金に替えるしろものではないというpride――彼のもっとも忌みきらう桂冠詩人Southyへの呪うべき敵意、燃ゆるが如き嫌悪感が脳裏<sup>ひらめ</sup>に閃いたことであろう――との間でByronは悶々<sup>もんもん</sup>とした。

‘All the bullies on earth shall not prevent me trom writing what I like  
.....

“Coute qui coute””…（是が非でも…）

とKinnairdにむかってByronはいった。しかしながらその代償と犠牲はとても高価なものだった。世の呪いと、はては、哄笑を買わねばならなかった。

Southyの売らんかなの詩！

Byronの呪われる詩！

Byronの意中を思うとき、あの、若き日のケムブリッヅ大学時代の斗争的情熱は今なお脈々と彼のなかにたぎっていた。

しかし、その代償は事実あまりにも大きなものだった。

Byronは1823年あからさまに富、金銭に対して会<sup>くわ</sup>積<sup>せき</sup>的<sup>てき</sup>構<sup>くわ</sup>え<sup>え</sup>を示していた。

若き日の激しい情熱という貴重な鉅脈<sup>こ</sup>を苦勞してほりあてた、そしてその残<sup>か</sup>

す  
滓が今めぐりきている！

‘I love lucre’そして彼はこうつけ加えた。‘For we must love something’

それは――

Byronの心情のもう一つの面を物語るかのようなひびきを与える。彼は最寄りのとまり木に*いこいたい*、やすらぎたい、一面をもち、強くこれを希求した。

TrelawnyはByronが何のために蓄財するのか、その間の事情を推測しかねた。

‘He exhausted himself in planning, projecting, wishing, intending, postponing, regretting, and doing nothing……’と Trelawny は書いた。

Except writing poetryただ詩を書くことは別だった。例外だった。Trelawnyはそのことを忘れていた。

新しい年を迎えてByronはMary(Shelley)がhis Age of BronzeとThe IslandをCopyしてくれたことに対し金を支払ったが、前者は、戦後のヨーロッパと1822年のthe Verona Congressについての諷刺詩である。これはByronが今日なお、その目標とされている攻撃を準備しようとしたことを示した。

Year after year they voted cent. per cent.,  
Blood, sweat, and tear-wrung millions—why? for rent!

The Bouuty号の叛乱の実話に基く‘the Island’は、単なる机上の空論、空想の所産ではない。旧約聖書の中のevilの問題が、やはりこの詩の中に実在する。

叛乱者のFlecher Christianが表向きはa ‘Byronic hero’となっている。しか

しProf Paul Fleckが指摘した如く、Christianは悪魔的<sup>たましい</sup>魂を取り戻し得ぬ存在である。

いま、ひとりの叛乱者Torquil青年はAdamよりももっと人間的やり方で罪を犯す。それゆえに愛によって救い得ない。

第3のhero-typeはBounty号の船長William Blighであるが、彼は“the Law”の道德性にてらして、たくましくMoseのように、彼の部下たちを希望の国——England——へと導くであろう——もし彼らが彼にしたがいさへすれば。

この作品の中に‘perfection’（完成）の象徴として‘island’（島）を用いたことは、それが‘Old England’のことであれ、あるいはToobonai in the South Seasであれロマンスとしては陳腐なものである。ParadiseそのものもAdam’s sinアダムの原罪とは‘insulated’孤立している。

Byronは——

Venice or Greeceのことをgreenest islandとのべたが、それと同じ意味で、

この‘island’ということばを使用している。つまり、Byronはidealを意味する、この<sup>・</sup>比喩、即ちgreenest islandはRousseauのNovelle Héloïse at Diodatiを再読して心にひらめき湧いたものかもしれない。ここで——Byronは、JulieがClarensの彼女の荒れ果てた庭を秘かに耕しているのを知った。——彼女はこれをher ‘Elyseum’（楽園）、her ‘desert island’と呼んだ。

彼女の恋人Saint-Preuxが最初にこれを見たとき彼は、これをtwo South Sea islandsの名前でO Tinian! O Juan Fernandez!

Julie よ、この世の果ては、お前の<sup>かどで</sup>門出だ！と呼びかけた。そしてそれはToobonai でもよいのだろう。



この世の果つるところ！ The world's end!

Byronにとって、Perfectionとは！ Perfectionに充たざるものはThe world's endでありこれ以外のすべては彼の心をみたすことはできなかった。そしてもし——

Byronが生きて、この未完の、<sup>・</sup><sup>・</sup>珠玉の作品Don Juanのtwenty-four cantosがなお、その全篇完成の日をみることがあったならば、詩人は、his Juanをそのthe world's end, perfectionに手をとって導きゆくことができたであろうものを！！

そして一方、Teresaは——

心配のあまり、きっとこのべたにちがいない

‘Juan had moved to the land of Byron's birth for the English cantos’

<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>ここに、彼女は、Byronについて<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>ゆくことはできなかったのだ！

しかし他の誰でもできたであろうが、自分<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>だけはできないとわびしく確信した。

この春——

Marguerite Blessingtonが外国旅行の途中、ゆたかな彼女の夫、Blessington伯爵と共に、そして、生涯の友であり、gifted artistである若きD' Orsay伯爵と共にGenevaに着いた。Morsguste Blessington は、

——Irelandに生れ、cruelな幼き日の幼児結婚——政略結婚を逃れて、才気煥発の、今美しい盛りの34才のこの名流婦人は、後にロンドンのエリート階級の生活をつたのしみながら‘Books of Beauty’を書いた。

彼女がByronに——Mooreの所謂——

‘a breath of his native air’‘祖国英国の息吹<sup>いぶき</sup>’を運んできてくれた。

それは同時にまた——

ByronがかってMelbourn公爵夫人に見出した貴族的女性の息吹<sup>いぶき</sup>でもあった。一  
軽薄<sup>けいはく</sup>さのない、ねばっこい、ぢゃれつきのない、いちやつくこともない真の美  
しさ。‘The Blues’知的女性の鼻にかかる、高慢ちきな理性をひけらかすことも  
ない、高貴な英国女性のエリートな息吹<sup>いぶき</sup>でもあった。

Byronは今——

これらのエリートの客人たちの歓待に、心から献身し、あるときは乗馬を、  
あるときは、馬車で駆けることを、あるときは dinner party をたのしむことに  
忙殺された。

そのため——

Teresaは落ちこみ、はてはひきつけを覚えるほどにジェラシーに燃えた、狂っ  
たこともあった。それは英語が話せないためグループから孤立<sup>・</sup>したためであっ  
た。

Lady Blessingtonの著、‘Convesations with Lord Byron in Italy’——彼女が  
ItalyでByron卿と交<sup>か</sup>わした談話は彼が生涯決して使用しなかった、キビキビし  
たスマートなフランス語のphrases文句にもかかわらず、彼の死後出版された最  
もすぐれた、いくつかのレポートを載せている。

“There is something……………in the poetical temperament that preludes  
hapiness, not only to the person who has it, but to those connected with  
him.”

“この、Don Juanの詩集の中には、これをもつ人のみならず、Byronに関係

をもった人々に対する‘幸福’を予知する何かがある。”

このBlessingtonのことはゆえに、われわれはByron卿が、このことをはっきりと自認したことを、うかがい知ることができるのであり、そのことはLady Blessingtonの大いなる功績であろう。

Byronはきっぱりと公言した。

僕に絶えずつきまとい、そしてこれだけはしっかりと胸にいだき続けている感情は只、二つ、だけしかない。それは――

- (1) 自由への強いあこがれと、そして
- (2) 偽善的<sup>から</sup>空念佛をひどく忌み嫌う、嫌悪感  
なのである。そして――

Byron独得の希望を彼はこうのべた。

‘You will think me more superstitious than ever ……when I tell you, that I have a presentiment that I shall die in Greece. I hope it may be in action, for that would be a good finish to a very triste existence……’

“もし、僕が貴女に僕はギリシャで死ぬだろうという予感がすると云えば、僕のことを‘案外、迷信的だワネー。’ときっと思われるでしょう。しかし僕は、この予感が的中することを望んでいるのですよ。何故なれば、もしそうであれば、憂愁にみちて生きてきたことに有終の美を飾ることになるだろうから”と語った。

こよなく愛した、あのGreenest Island ギリシャ、で憂愁にみちて生きた36才の生涯に有終の美を飾り、ピリオッドをうつんだ！

というByronの<sup>おもい</sup>想は、今、この世で最も愛した女性、Teresaと、ここ、イタリーでこの世の樂園を、悦楽をころゆくまで味ったのちTeresaに対する、Edenの園に対するあこがれが、<sup>せつせつ</sup>愉悅が、しずかに退潮してゆくとき……Greenest Islandへの<sup>せつせつ</sup>慕情が、切々たる<sup>おなみ</sup>慕情が——

しかしそれは最高の死地を<sup>ごんぐ</sup>欣求するByronの‘完成の心境’の<sup>しづ</sup>肅かな到来を告げるあの<sup>ふゆ み なぎさ</sup>冬海の渚にうちよせる<sup>おなみ</sup>男波にも似ていた！

### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.